



第2章 林業の現場から

神戸で活躍するプロのダンサーから一転、経験ゼロから林業へ参入した中島彩さん。舞台は、吉和の山林へ。森林の担い手として、日々、山と向き合い、木と向き合う、中島さんにお話を伺った。

写真 1 吉和で森林(もりの担い手)として、日々木と向き合う中島さん(写真右)。写真は、立木密度を調整するための保育間伐と呼ばれる作業で、スギを伐採する様子。現場作業と並行して、施業プランを作成することを勉強中という中島さん。「その地域に合った50年先、100年先の山をどうしていきたいかを実際に山を歩き勉強しています」と話す。

「想像がつかないくらい、いろんなことが起こりますが、毎日が楽しいです」。そう話すのは、中島彩さん。神戸から単身で吉和に住み、日々、現場で作業に汗を流している。

「(中島) 林業に勤めて現在5年目の中島さん。植林、伐採から搬出まで、ほぼすべての林業の工程を経験し、現在は保育間伐の班長を務める。

「搬出間伐を経験したときから、丸太に興味を持つようになり、丸太に年輪を見れば、その木がどんな風に育ってきたか、どのくらいの樹齢でその木にどんな事件があったかが分かるんです」。間伐した次の年は年輪が大きくなる。また、年輪のゆがみで、どの方向にどんな障害があったかなどが分かるという。「仕事が休みの日にも、市場へ丸太を見に行くことも多いです」。

そんな中島さん、幼いころからバレエを続け、大阪芸術大学舞台芸術学科を卒業後、プロのダンサーとして活動した経歴を持つ。「二つの夢があり、25歳まではダンスを続けようと思っていました。そしてそれからは、もう一つの夢である『自然を守る仕事』がしたかったんです」。

家が六甲山のふもとにあり、幼いころにお兄さんとよく遊んでいた山が住宅開発のため、あ

る日突然入れなくなつたのと、ダイナマイトの爆発を目の当たりにしたときは、大きな衝撃を受けたという。「とても悔しかったのを強く覚えていますが、住宅開発は悪いことではありませんが、将来、自分の遊び場を取り戻すぞと誓ったんです。ひどく自分勝手な理由ですよ」と、笑って話す。

「25歳を過ぎて、『自然を守る仕事に就きたい』と、調べていくうちに、『山を育てるのは林業だ』と、気付いたんです」。

鹿児島県で開催された林業就業支援講習を受け、その講習で林業者に必要な資格も取った。現在は、林内作業車、小型移動式クレーン、玉掛け、車軸系建設機械など7つの資格を持っている。機械化により、女性の担い手も増えてきたとはいえ、県内で女性の従事者は3人と、林業への女性の進出は少数だ。

そんな折、社長の安田孝さんと出会い、実際に安田さんの山を見た。「こんな人工林があつたらいいなと思うものがそこにあつたんです。それはそれは美しい山でした」。吉和の山に一目惚れしたという。

時には、安田さんと山のことと議論を重ねることもあるとのこと。「一緒に山を歩いていると、社長がどれだけ山のことを

吉和で森林に、どっぴりつかってますー。



(中) 安田林業 なかしま・あや 中島 彩さん (31歳・吉和)

兵庫県神戸市出身。25歳を期に、舞踏家から一転、自然を守る仕事に就くことを選択。現在、(中) 安田林業に就職し、吉和の山林で毎日木と向き合っている。



写真 2 切り出した木材が集まる土場(どば)。中島さんは木材をつかむ林業機械の「グラップル」も操縦する。写真 3 吉和での生活をまとめた本も出版。写真 4 タブでなければ林業はできない。スローライフではない生活がそこにある。

愛しているかが分かります」。ゆかりのない地に単身でやってきた大変さも、地域の人が温かく包みこむ。「野菜をくださったりと、雪かきをしてくださったりと、地域の方にはいくらか感謝しても足りません。特にお願いの坂田さん夫婦には、よく夕食をご馳走になってるんです」。

得意のダンスを生かし、昨年からは地域のひとと一緒にフラダンスを始めた。また、冬には吉和の小学生にスキー指導のお手伝いをするなど、日中仕事で家にいない分、時間の取れるときは積極的に地域と関わる。

「たまに神戸に帰っても、吉和のことが気になります。今ではこの吉和が帰る場所になりました。ここでなければ5年も続いていると、言いたくないです」。植えた木を切るためには3世代かかると言われる林業。将来の計画を持たないと回らない産業だ。

「今、切り出している木は、先人が植えたものです。そして、今、植えている木は、わたしの後に続く人に切り出されるもの。莫大な長い時間をかけて循環しているその一部に携われることに誇りを持っています」。

植えて、育てて、切る。そして、また植える。その循環が林業の役割だと思っています。

自然に生えている木を切って売るだけでも、仕事にはなりません。しかし、それだけでは良い木は切れませんし、育たない。畑でも土を作り、種や苗を植え、雑草を抜き、丁寧に育てて収穫する。山もサイクルが長いだけで、それと同じなんです。

現在、スギやヒノキを中心に苗木を植え、育てていますが、人の手が掛かった人工林は、一度植えると、切るまで人が管理しないとダメです。

挿木で1~3年育てる「苗木の生産」、苗木の植栽を行う「造林」、春先に雪で倒された植栽木を引き起こす「雪起」、成長の妨げになる雑草などを刈り取る「下刈」、不良木や不要木を切り払う「除伐」、立木密度を調整するための「保育間伐」、手入れと収穫を兼ねた「搬出間伐」、伐期に達した成熟木を切る「主伐」と、これだけの工程を繰り返して山林を管理しています。

そうして林業者が林地を管理していくことで、山の機能が維持・増進された状態をつくることができます。

木を植えて、育てて、切る。そしてまた植える。人工林においては、その循環を続けていくことが林業の役割だと思っています。

吉和地域のスギは樹齢100年くらいで成熟します。例えば3,000本の苗木を植えても、間伐を行うため100年後には200本くらいしか残りません。スギという資源をただ切り出しているのではなく、山という資源を使って手間と時間を掛けて育てているんです。

廿日市市には広大な山林があり、春や秋になるときれいな姿を見せてくれますが、山はそれぞれ特徴を持ち、大切な資源だという気持ちを持って山を楽しんでもらえたらと思います。



(左) 安田林業 代表取締役 やすだ・たかし 安田 孝さん (51歳・宮園)



(中) 安田林業 廿日市市宮園二丁目7-6 冠工房 廿日市市吉和2536 問合せ ☎2760

祖父の代から吉和の所有山林を個人で手入れしていたが、平成4年に孝さんが法人化。吉和の山林でスギ、ヒノキを中心に、苗木の生産から造林、伐採までを行っている。緑の研修生なども受け入れ、攻めの林業を展開。